

「よろしくお願いします」

さざめきたつ波の音、漂う潮のにおい

陽の光が模る真つ黒な鳥が、砂浜を横切っていく

樹海ではなく、現世にて真紅の勇者服に身を包んだ三好夏凜は目の前で佇む自分の戦技教導官である、久遠晴海を見つめる

晴海は勇者の力がない一般人ではあるが

その力は単なる人間の域を超え夏凜を持ってしても化け物。と呼ばざるを得ない実力者だ

「……………」

まだ模擬戦が始まってすらいなのに、緊張に搾り出された汗が頬を伝って落ちていく

黙っているだけで、息が詰まりそうな恐怖感が滲み出る

何度も模擬戦は行っているが、まだ、一撃の余地すら掴めていない

その明確な実力差に物怖じしそうな心を、約束が、思いが、願いが、驚掴む

相手は化け物クラス、下手したら単調な攻撃しかないバーテックスより格上の可能性もある。が

そこで逃げるわけには行かないのだ

「ッ」

ふっと息を吐いて、強く歯をかみ合わせつつ地面を蹴飛ばし超加速

晴海との距離をほんの一瞬で詰めて、肉薄する

晴海の顔に驚きは無い、挙動に動きも見られない

しかし、夏凜の心に余裕は無かった

一本取れた、してやったりという感覚も存在しなかった

「ッ」

地面スレスレの前傾姿勢から刀を振り上げようとした夏凜は背筋にゾワリとした悪寒を感じ、

柄を地面に激突させ、横飛びに転がる。その刹那、夏凜が数瞬前にいた場所が炸裂音を響かせ、砂粒を飛散させる

晴海が扱う抜刀術の一つ、待月

相手が迫ってきたときに放つ受けの型で、相手の俊敏性を利用して真つ二つに叩き斬るのが基本だが

晴海の場合は相手の速度に合わせてさらに自分からも振りぬく殺意に満ち満ちた剣術

晴海は反応出来なかったのではなく、ただ黙って一撃を待ったのだ

そして――

「――！」

横飛びに逃げた夏凜を追いかけて太刀の切っ先が砂浜を穿ち、

蹴り飛ばされた砂、闘牛のごとき突貫姿勢の化け物が夏凜の視界に映る

「はっ！」

カチンツツと納刀の音がした瞬間、夏凜は頭の中で考えるよりも早く刀一本を投げ飛ばして、爆破

その爆風で自分の体をさらに飛ばして、半転ふらつきそうな体を何とか持ち直して刀を構えたが――

「弧月」

真上から振りぬかれた太刀に対して刀を振り上げたが、当然弾くどころか弾かれて

「円脚――！」

バランスが崩れた体、その後頭部に踵が届きかけて赤い光が迸る。精霊の加護だしかし、精霊の加護が防いでくれたから良いわけではない

寧ろ、この戦いではそうだった時点で負けたようなものなのだ

「遅く」

「……すみません」

一旦仕切りなおし

そう告げて離れる晴海の言葉に、夏凜は刀を強く握り締め歯を噛み締める

遅いとは言われたが、本気なのだ

自分は勇者で晴海は一般人

その補助面において明確な差があるということが殺しかねない恐怖を引き出して
いる可能性は否めない

だが、それを差し引いても、全力の速度が【遅い】といわれたことが悔しかったのだ
刀の爆発を利用しての跳躍、そこからの下段斬り払い、弧月にさらに繋いだ円脚
どれもこれも、目で追うことは愚か、感覚ですら追いきれなかった

それはつまり、晴海がわざわざ技名を言わなければ反応さえ出来ないかもしれないな
いということだ

私が一々、技名を言う意味を考えて夏凜

「はっ」

次は私から行くから、ミスしないように」

晴海はそう言うと、左腰の刀の柄に手をかけてゆっくりと前傾姿勢に移行してい
く
何度も逃げようとして喰らった晴海の抜刀術

良く見ていないと初期微動を見逃すしそれを【覚えても見えない】為に名付けら
れたのは……

晴海の体が傾き続けて、止まったように見えた——瞬間

「.」

「――新月」

夏凜の全力よりも早く、砂埃が遅れて舞い上がる中、
鞘から半身を抜かれた刀が夏凜へと迫っていく

目で負うことを許さない幻覚かと思紛う一瞬の肉薄だった

ギリギリ刀が見えた夏凜は、せめて、と、刀を盾にしようとしたが
僅かに見えた晴海は怒ったように眉を潜めて

「――月食」

夏凜が前に出した刀は僅かな接触を感じただけで終わり、

腹部が横一文字に抉り抜かれるような痛みを感じ、体が浮いて

かっ」

「ふ——はっ！」

晴海はそのまま刀を振りぬいて夏凜を撃ち飛ばし、息をつく

「防御なんてしたら駄目って言ったでしょ」

晴海が使ったのは、防御を通り抜けて相手を切り裂く月食と呼ばれる剣術だ。相手の武器、あるいは盾との接触間際、柄を握る尾側の手で柄を押し、刀身を斜めに逸らして盾の横を走らせ、隙間に差し掛かった瞬間に今度は柄を引いて肉を断ち切る。

言葉にしてみれば簡単そうだが、その扱いは意外と難しく、相手の位置、相手との距離、自分と相手の速度、相手の盾幅、盾と体の空間全てを把握できなければ、大体が失敗に終わる。そしてこれももちろん、晴海が適当にそれっぽいからと名前をつけた技だ。

「っ……くっ、はっ……はっ」

今回は峰打ちだったが、そうでなければいくら勇者の体と言えど、切り裂かれていたのは間違いない。

というのも、晴海の刀が夏凜の体と腕の間に入り込んでいたため、精霊の加護が発生させられなかったからだ。

大きく息を吐いた夏凜は、もう一度体をたたせて、晴海を見る。大きな怪我は無いが、疲労感のある自分に比べて何一つ無い晴海。やはり、差は歴然だった。

「私はね、夏凜。貴女の何倍以上も努力をしてきた」

「……………」

「勇者の素質がないと解っても。それでも、よ。だから、勇者になっただけで追いつかれるわけには行かないのよ」

晴海はそう言うのと、抜き身の刀を鞘に戻して、手を振り「また明日」とだけ残して去っていく

自分よりもいくつか上の高校生

鍛錬なしにも自力が違うが、それに付け加えて努力が足りない、鍛錬が足りない大赦にいた頃、教導官は女を捨てたと言われていたが、実際に会ってその通りだと思ったのを思い出す

男性のようにふとましいということはないけれど、同年代と比べれば一回り以上も太い両腕と両足

腹筋も背筋も固く、厚く、殴ればこっちが怪我しそうだと思うほどで

「……思いは同じ、妹を守りたかった。か」

以前聞いた晴海が強くなったわけ、女を捨てたわけ

姉として、本当に必要なときに妹の助けになることが出来ない苦しみと、辛さと、苛立ち

その全てを自身の力に変えたのだ

い 勇者の力があるとしても、力なき勇者であろう晴海には、易々と勝てるはずが無い

しかし、だからこそ夏凜は勝つべきだと思う

力を授かったのは自分だから

晴海の方まで晴海の妹を、天乃を、天乃が望む世界を、守りたいと思うからそれが出来るのだと、二人を安心させたいと思うから

そろそろ……いや、もう少しだけ」

夏場の夕日が少しずつ消え行く中、夏凜は一人砂浜で刀を振るう。

早く、もっと早く、何よりも早く。せめて、晴海の刀の動きには付いていけるように——と。